

北大路魯山人 (1883-1959)

清水 真砂 (世田谷美術館 学芸員)

北大路魯山人の名前は、現代の日本において陶芸に興味をもたない人々にもよく知られている。むしろ陶芸家として以上に、彼が料理長を務めた高級料亭での、食器を始めとした食にまつわる様々な配慮や拘り、独特の美学に支えられた暮らしや生活姿勢の方に人々の興味が惹きつけられているところもある。そのような現象は、彼の陶芸制作の契機が食事を供する器を作るというところにあったことや、彼の制作姿勢が、日本人好みの「陶芸の道一筋」という在り方とは少々異なっていたことも影響しているかもしれない。また、そのことは、長い間魯山人の陶芸をうさん臭いものとして陶芸家の側からは一線を画されていた理由でもあった。しかし魯山人の陶芸はそのように軽んじられて良いものではないことは、彼の没後 50 年を過ぎてなお、多くの愛好家を惹きつけて止まないことでもよく解る。魯山人の芸術の基盤は、最初に天分を自ら見出した書や篆刻にあり、筆や鑿を自在に繰る力量が陶芸に活かされ、幼少の頃から憧れていた絵画にも発揮されていった。同時に、書・篆刻で身を立てようとしていた頃に出会い、パトロンとなってくれた各地の有力者たちの所で目にした様々な美術品や耳にした芸術談義が、彼の芸術を培う豊かな土壌となっていた。それらが相俟って、料理を含む陶芸・漆芸・書・篆刻・絵画といった多彩な彼の芸術を作り上げている。

従って魯山人の芸術についてさらに詳しく語ろうとすれば、彼の生い立ちや人生について触れないわけにはいかない。

北大路魯山人は 1883 年 3 月 23 日に京都上賀茂神社の神事に代々携わってきた北大路清操・登女の次男に生まれた。名を房次郎という (混乱を避けるため以下も魯山人で統一)。明治維新 (1868) 後の 1871 年に日本全国の神社の神事に携わってきた人々の身分が廃止され、北大路家も困窮した時代であった。父親は魯山人が生まれる前に死亡し、魯山人は産まれるとすぐに里子に出され、養家を転々とする悲惨な境遇の幼年時代を送った。6 歳で版下木版師・福田武造・フサの養子になった。福田家では食道楽の養父母のために炊飯をし、料理を手伝い、美味しいものを提供すると人に喜ばれるということを身に沁みて学んだ。4 年間の尋常小学校を卒業すると千坂和薬屋という薬屋に丁稚奉公に出されたが、奉公先で目にした日本画家・竹内栖鳳の絵を見て感激し、栖鳳の下で日本画を学びたいという思いが募り、13 歳で奉公先を飛び出して実家に戻る。しかし経済的事情から、日本画を学ぶことは許されず、実家の版下書きを手伝っていた。日本画習得の思いは断ち切れず、画材などを買う資金を少しでも得ようと、当時京都で流行していた自社や商店主催の習字の懸賞「一字書き」に応募して上位入賞を重ねるようになる。自らの書の才能に気づき、書で身をたてようと決心した魯山人は、当時一般に広がり始めた西洋看板 (ペンキ看板) の仕事も手掛けて資

金を貯め、実母が東京にいるのを耳にしたのを機に1903年、書を本格的に学ぼうと上京した。

魯山人は当時世間で大家と認められていた日下部鳴鶴や巖谷一六を訪ねたものの、彼らの書に対する考え方に疑問を感じ、深く師事するには至らなかった。しかし翌年11月、第36回日本美術展覧会の書の部門に隷書「千字文」を出品すると褒状1等2席を受賞、宮内大臣田中光顕に買い上げられた。書家として幸先の良いスタートを切った魯山人であったが、それだけでは生計を営むには至らず、優れた版下書家岡本可亭（岡本太郎の祖父）の内弟子となった。次第に師を凌ぐほどの人気を得るようになった魯山人は、可亭から鴨亭の号を貰い独立した。書の研鑽を積むために中国行きを望んでいた魯山人は、1909年に実母登女の朝鮮旅行に妻子を放置して付き添い、朝鮮で別れたのち、知人を頼って当時の韓国総督府印刷局に勤め、3年に亘り現地に滞在した。この間朝鮮各地はもとより、中国にも足を延ばし、古代の石碑や篆刻から書を熱心に学び取った。帰途には上海で書・篆刻の大家として当時大変人気のあった呉昌碩にも会い、大いに感銘を受けて帰国した。帰国後再び東京京橋で書・篆刻の看板を掲げ朝鮮・中国で学んだ書を独自の書風として仕事に励むうちに、次第に魯山人を最真にする裕福な実業家が現れた。滋賀県長浜の河路豊吉・柴田源七、京都の内貴清兵衛、福井県鯖江の窪田朴了、金沢の細野燕台などである。彼らのもとに身を置くことで、古美術鑑賞の目を養い、芸術談義を耳にすることが出来、魯山人は教養を身に付け、自ら人格形成に励んだ。料理や食器に対する感覚に新たに目を開かされるのもこの時期である。細野燕台の紹介で、金沢近郊の加賀山代温泉に滞在し、旅館等の看板を数多く彫り、その縁で須田菁華窯に出入りし陶芸に手を染めたり、燕台の仲立ちで金沢の料亭「山の尾」の太田多吉の知遇を得、料理について学んだことも後の大きな財産となった。この1913年から1916年にかけては、刻字看板制作のひとつの頂点であった。長浜にある幅417.0cmの《呉服》や京都の幅181.8cmの《柚味噌》の看板などは圧巻である。

その後再び京橋に戻り、友人の中村竹四郎と共に古美術鑑定販売の「大雅堂美術店」を始めた魯山人は、来店した顧客に食事をふるまうようになり、店の古美術品に盛って食事を供したのが料理の美味しさと共に話題となり、骨董販売のみならず会員制の「美食倶楽部」を発足させた。1923年の関東大震災で大雅堂美術店が消失し、芝公園内の「花の茶屋」で「美食倶楽部」を再開させたが、落ち着いた場所を求める会員たちの希望に沿うべく、場所を求めたのが赤坂山王台日枝神社境内にあった施設「星岡茶寮」を改築し、会員制の高級料亭とした「星岡茶寮」である。共同経営者中村竹四郎が社長、魯山人が顧問兼料理長となり1925年に開設された。魯山人の次なる活躍の舞台はこの「星岡茶寮」であり、今我々が抱く魯山人のイメージはこの「星岡茶寮」での活躍で形成されたものと言ってよいだろう。

魯山人は総合ディレクターのような立場で、食事のための環境作りと料理人の指導、食器その他の備品の吟味・手配などを一手に引き受けた。星岡茶寮で用いる膨大な数の食器を常備するために、魯山人は茶寮開設の翌年、北鎌倉に約7千坪の土地を借用し、住居と窯場を設けた。窯場には優秀な陶工を集め、魯山人の指導のもと、制作を開始した。窯場に思うよ

うに水が出ないで困っていたのを、水脈を掘り窮状を打開したのは利根ボーリング社社長の塩田岩治であった。星岡茶寮はこれまでの形ばかり飾った料亭料理と異なり、吟味された食材の持ち味を活かした格式に捉われない料理を、隅々まで神経の行き届いた環境で味わうというものであった。美しい大鉢に豪華に盛り付けた料理を、給仕の女性たちが銘々に取り分ける料理が主流で、女性たちにはお酌をさせず、清談を楽しむものであった。料金は簡単に比較できないが、強いて言えば、昼食が当時の価格で5円、夕食が10円という当時としては破格の値段であった。それでも政財界の名士はこぞって会員となり、星岡茶寮の会員であることが名士としてのステイタスシンボルとなるような状況であった。1935年には大阪に「大阪星岡茶寮」を開設するに至り、得意の絶頂にあった魯山人だったが、茶寮運営における傍若無人の振る舞いや金銭感覚の放漫さが目に余り、従業員たちの反発も引き、1936年に社長の中村から解雇が言い渡されるという事件となった。星岡茶寮開設から11年、当時の日本の食文化に新風を巻き起こし、星岡茶寮の料理長として一世を風靡した魯山人は、自ら築き上げた食の殿堂からの撤退を余儀なくされるのである。53歳の魯山人に残されたのは北鎌倉の自邸と窯場や陶工であった。

この苦境に立った魯山人を支援したのは、書家として地方を渡り歩いていた頃から魯山人を支援していた人々や、星岡茶寮で彼の非凡な才能に魅了された人々であった。とりわけ世田谷区に壮大な邸宅を構えた、製菓会社「わかもと」の社長夫妻は「わかもと奥様券」の景品に魯山人の陶磁器を使うことを考え、魯山人に大量の陶磁器を発注したので、窯場は息を吹き返し、魯山人は陶芸家としてのスタートを切ることができた。さらに、利根ボーリング社長の塩田岩治を始め多くの支援者たちも自宅用や贈答用の陶磁器の発注などにより、窯場は活況を呈した。絵画も含めた展覧会も度々開催され、作品の売れ行きも好調となった。魯山人周辺の人たちも様々な形で魯山人を盛り立てた。東京や名古屋には魯山人の食器を大量に注文し、接客も魯山人に助言を求める料亭もあった。第二次世界大戦中の1942年には、窯は一時閉鎖され、魯山人は利根ボーリング社に籍を置きつつ、金沢方面や名古屋の漆工職人とともに漆器の制作も手掛けた。1945年には星岡茶寮は空襲で焼失。魯山人が星岡茶寮を解雇された事件は、結局細野燕台が間に入って示談となり、魯山人は北鎌倉の自邸と窯場、古美術の半分を所有することとなった。

終戦の翌年、63歳になった魯山人は銀座に直売店「火土火土美房」を開設した。看板には「KADO-KADO BIBO SPECIALTY SHOP OF “ROSANJIN” GREATEST ARTIST IN JAPAN」と書かれていた。戦後の魯山人の活躍の舞台は国際的なものとなる。魯山人の作品は欧米人たちの心を捉え、多くのファンが北鎌倉の窯場を訪れた。塩田岩治宛の手紙で「米国人の自由生活は小生の共鳴者にこれありそうろう」としたためたのはこの頃であろう。彫刻家イサム・ノグチと親しくなり、共に岡山の金重陶陽を訪ね、備前焼の作品を制作したり、イサム・ノグチと山口淑子夫妻を北鎌倉の窯場の家屋に寄寓させたりしている。また個人誌『独歩』を一部英訳付きで発行、パナマ船籍の貨客船アンドリュー・ディロン号の食堂や喫煙室の漆パネルに陶片を嵌め込んだ壁画も制作した。71歳の時に、ロックフェラー財団の招きにより

アメリカ、ヨーロッパを2か月半かけて展覧会や講演会を行いながら旅行し、持参した作品全てを美術館や大学に寄贈している。この旅行ではピカソやシャガールに会ったり、ルーブル美術館を訪ねたりもした。ラ・トゥール・ダルジャンの鴨をわさび醤油で食べたという逸話を残すなど話題には事欠かなかった。招聘にも関わらず旅費を受け取ることを潔しとしなかった魯山人のこの旅行は、その後彼を経済的に逼迫させたようで、帰国後、収入を得るために数多くの作品を制作し、展覧会も次々に行っている。1959年、「これからは書でいこうと思う」と語って、10月に京都美術倶楽部で「魯山人書道芸術個展」を開催したが、これが最後の展覧会となり、12月21日にジストマによる肝硬変で帰らぬ人となった。享年76であった。

かくのごとく個性的で波乱万丈の魯山人の生涯であったが、その時々には非凡な才能を駆使して芸術活動を行い、多くの人々を魅了したと言って良いだろう。

このたびの魯山人の展示作品は、彼の北鎌倉の窯場に水脈を掘り当てて水を供給してあげたのが縁で魯山人と親しく交わるようになった当時の利根ボーリング社長塩田岩治が、魯山人との生涯にわたる交遊を通じて入手し、その多くを日常生活で使用していたものの一部である。塩田は多くの趣味をもっていたが、夫人と共に茶の湯も楽しみ、そのために茶道具も多く含まれ、今回はそのごく一部も紹介している。魯山人の器は使うことによりその良さがわかるとよく言われているが、これらはその良い例であろう。